



ましたが、それでも、徳川期の大実験から考えると、四つの島を合わせて自立人口の限界は4000万人くらいかと思っています。それが今、日本の人口は1億2700万人います。グリーンでいえば8700万人は過剰人口なのです。日本の食料自給率は2007年実績でカロリーベース40%です。これでは今の人口を維持することは困難です。それに加えて、世界を支えてたがいに競うための世界共有人材としてのあの大きさの精鋭人口がいります。2000～3000万人くらいでしょうか。なぜならば、2050年には、いま大成長しているアジアの人口さえも減少に転じそうで、人類世界は初めて広く飽和状態に達するのです。

◆ 次の時代の キーワードは「共生」

——人口減少は、地球上の資源などが限界に達したことから始まるということですか。

丹保——食料生産用の水は今でもかなり非循環型の大量の地下水を灌漑に使っています。何百年も前から蓄えられている水をくみ上げてしまっているから、水もなくなり、石油の枯渇と同じです。また、世界のエネルギー消費量は、地球全体で年間に約10¹⁵Wh(テラワット時)にのぼっています。地球上の資源や環境の制約から、地球上の適正人口は現在よりも少ないであろうということ。さまざまな推計では、1000～110億人くらいが世界人口のピークではないかと言われています。全世界が近代の先進

国なみを求めたら60～80億人が暮らすのも難しいと思われ。途上国が成長して、地球の人口が100億人をいったん超えても、オーバースhootして(ピークを飛び越えて)人口は再び落ちていくであろうということです。

私は近代から次の時代の文明を、3段階で考えています。成長時代としての「Original Modern(近代前期)」、環境制約時代としての「Late Modern(近代後期)」、そして、次にくる共生／共死時代としての「Post Modern(近代の次・後近代)」です。

19世紀が始まる前、近代のデファクトスタンダード(事実上の標準)はイギリスがつくりました。鉄道も水道も、都市計画も、民主主義も、ゴルフもラグビーもイギリスから始まりました。成長の時代でした。しかし、20世紀後半、環境制約によつて成長にブレーキがかかり、雲が出始めました。そして、世界がオーバースhootし始めるのが、近代の次の時代です。そこで生き残るためのキーワードは「共生」です。

日本は世界に先駆けて、人口減少の時代に入りました。そのときにどうするのか。コンパクトシティなどいろいろな話が出てきていますが、それが2002年に私どもが『人口減少下の社会資本整備』という本を書いたときのポイントでした。

◆ 日本は次の文明の 最先端の位置にいる

——世界的な人口減少が起き、オーバースhoot

し始めるポストモダンの時代に向けて、日本はどのようなことができるのでしょうか。

丹保——日本は世界でも最初に本格的に人口減少社会を迎える大国ということになります。他の国がまだ経験していないことでは、日本は人口減少化の先進国なのです。イギリスは実質上の近代の標準をつくり、2000年間世界に君臨し、今なお強い影響力を持っています。同じように、日本が文明の最先端位置にあることを自覚すれば、22世紀の日本は近代を最初に卒業した国として、後近代の先進となり、22世紀のデファクトスタンダードをつくり出せる可能性があります。

人口構成が逆ピラミッドになり、少子高齢化社会で人口が減り、日本は縮むだけだと多くの人は思っています。しかし、長寿社会において、日本が世界に先駆けてデファクトスタンダードをつくれたら、世界で最初にオーバースhootから抜け出すことができます。かつて日本は文明の創造者だったことはありません。長らく中国文明の亜流でした。

しかし、イギリスもヨーロッパ文明の亜流だったのです。その亜流が立ち上がって、イギリスは最初に近代へと抜け出しました。私は人口減少を千載一遇のときかとも考えています。日本人はそれに対してどういう処方箋を出せるのか。土木を含めあらゆることを考えていくことが必要だと思ふのです。世界の大国の中で、高いレベルのGDPをもつて一番先に人口減少化に踏み込んだということは、次の時代の実質上の世界標準を